

Title	欧州戦乱期に於ける英仏両国大小農制度に関するアーサー・ヤングの研究 (其一)
Sub Title	
Author	福田, 徳三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.10 (1914. 12) ,p.1229(1)- 1254(26)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

各編に於て先づ重要用語の定義を與へ、且つ根本學理を略述せる後我財政の現狀を紹介し、其良否に關する著者の斷案を下せり。

本書は學理の詳解、學說の考照等に重きを置かずして、主にも歴史的記述と統計とを用ゐて讀者をして我歳入歳出に關する一般的知識を與ふるに努めたるが如し。間々諸外國の事實及び統計を併載して彼我の對照を便にせり。吾人は小林博士の筆に成る此有益なる著述が廣く世に行はるゝに至る可きことを信じて疑はず。

三田學會雜誌 第八卷第十號

論 說

歐洲戰亂期に於ける英佛兩國大小農制度に關するアーサー・ヤングの研究(其一)

福田 徳三

目 次 (其一)

- (一) 開 題
- (二) 社會政策學會に於ける小農保護論
- (三) 神戸、氣賀兩教授の農村改良論
- (三) 本 論

(一) アーサー・ヤングの爲人并に學問
 第八卷 (一二二九) 論 說 歐洲戰亂期に於ける英佛兩國大小農制度に關するアーサー・ヤングの研究 第十號

(三) 『政治算術』に見られたる英國大農論

(A) 『政治算術』解題

(一) 開 題

(二) 社會政策學會に於ける小農保護論

本年開催の社會政策學會第八回大會に於ては小農保護問題の考究を其日程に載せたり而して當日の研究報告者三學者の中横井農學博士は我邦の農家の大多數は小農なれば小農保護問題とは取も直さず我邦農業者保護問題と同意義に落つるものなりとの出立點よりして農業保護政策の全體に涉りて多年の經驗と研究との結果を披瀝して該博精密なる改良の方策を詳論し更らに其足らざる所は會員のみの集合せる自由討論會に於て補説せられたり而も博士の説く所は實に廣汎莫大にして教育宗教政治行政警察風俗衛生等にも論及し微を盡し細を極めたりと雖も高野法學博士が然らば先尤も着手の急なる方案は何なりやとの質問を發せられたるに對しては何れを先にし何れを後にすと辨別し難し凡百の方法悉く皆之を同時に施さざる可からずと答へ更らに轉して農業獎勵の鐵案は其弊

害を痛論し其怠慢を鞭撻するにあり要言すれば『惡口を利くが尤も有效なり』而して先尤も痛撃に値するは農村に於ける『ゴロ的油虫』即ち是なりと答へられたり予は博士の所説を聞て先づ尤も感じたることは博士の立場は公平なる眞理研究を生命とする學者の其れよりも寧ろ逐日捉時の政治家の其れなるが如きこと之なき博士は根本の病源を究むることは之を省略し只管に應急の手當を急ぐ治療醫を以て自ら任とせらるゝにあらざるか若し予が這箇の印象にして正鵠を得たるものなりとせんか博士と予とは全然問題の觀察點を異にするものなるを告白せざる能はず『パーチザン』は學者の處す可き所にあらず説法教訓は之れを教法師より聞く可く學問研究者に求む可きことにあらずとは誰人も否定し得ざる講學上の根本鐵則たり博士は農村に於ける『ゴロ的油虫』を熱罵し冷嘲すること至れり盡せり然れども其『ゴロ的油虫』と稱せらるゝ人士も必ずしも皆初より『油虫』たり又はたらんと期せるものにあらざる可し現に博士の語らるゝ所によれば農村に於ける公共問題の此等『油虫』輩の力によりて圓滿に解決せらるゝ例尠からずと云ふ思ふに彼等と雖も自己の利益を追求するの外心農村の向上發展に存す

か、絶無にはあらざる可し。唯だ因襲の爲めに囚はれて『ゴロ的油虫』の悪名を下されざる可からざる状態に墮落せしもの亦之あらん。果して然りとせば農民の爲めに心身を盡碎して老の身に迫るを忘るゝ横井博士も其學者的立場を捨て去る以上、何れの日か講壇上に於けるの最高等ゴロ的油虫たるに至るなきを保し得んや、農村に於て農家改良の爲めに *Politikchen, Planchen, Reformchen* を案出し劃策すると、東京にありて農家改良に關し數十數百の方案を鼓吹するとは度合に於ての差は甚大なる可しと雖も、若し其方案にして真正の保護獎勵たる能はず、却て我邦農業の健全なる進歩を妨害するが如きあらば其の『ゴロ的油虫』たるに於ては、少くとも博士が高等油虫たりと斷言せられたる警察屬僚と唯だ其高等の度を加ふるの差あるに過ぎざるなきを得んや、漫然惡口を發するを以て尤も有效なりと稱し終に改良の根本に徹底せず、小策小術の幾十幾百を陳列するは、病源を究むることを爲さず應急の賣藥を雜然として投與する萬病醫に均しからずや。予は博士が日本農業黨の急先鋒なりと自任せらるゝ熱心と篤實とに深く敬服すること久しきものなるが故に、小農保護に關する博士の所論は熱心に之を敬聽せり、敬聽して

而して失望せり。急先鋒たる博士にして一貫の大主義を逸すること此くの如し、日本農業の前途誠に寒心す可からずや。予は農事に就て全然門外漢たり、然れども日本農業の向上發展を熱望するに於て決して博士に劣らず。故に討論を社會政策大會場裏のみに止めず、向後機會ある毎に之を繼續して博士一流の萬病萬藥的農業論を少くとも學問上に於て一掃する日の到來せんことを勉めんと欲するものなり。

報告者の第二たる添田法學博士は英國農制史に關する研究を開陳せられ、*ワン* 征服以來今日に至るまで英國は着々として其農業政策を誤り終に拾收する能はざる窮境に陥れりと斷定し、我邦は英國の誤れる所以に鑑みて宜しく其轍を履まざること注意す可しと論せらる。博士が英國の大弱點なりと斷せるゝものは其大農制度なり。予は經濟史の研究に於て博士這般の斷論に賛同すること能はず。千年に近き長日月の間全然誤れる農業政策を取りたりと博士の斷定せられたる英國が十八世紀に於ては世界農業の模範國として他の歐洲諸國は之を健羨し之を模倣するを維れ勉めたるは實に不可思議千萬ならずや。千年の長き誤を敢て

して而して世界第一の富強國となるを得たる英國ありとせば、吾人は博士の爲めに誤と痛罵せらるゝを甘じて、世界第一の富強國たらんと欲するものなり。誤と云ひ正しと云ふ經濟政策判定の標準は果して那邊に存するか。予は實に惑はざる能はざるなり。從て博士の所論に就ても横井博士の其れに於ける如く予は經濟史の一學生として更らに更らに討論を重ねんことを希はざる能はず。

之に反し報告者高岡法學博士の所論の大部分に就ては先づ其立場の全然學問的なるに服するは勿論我邦の過小農の弊を道破せらるゝ一段に至りては予は悉く賛同するものなり。博士は自ら「予が説は極端に馳せず中間に立つものにして尤も妥當なりと信ず」と言はれたるは多年熟考精研の結果到達したる確信なるが爲なる可し。

之を要するに本年の社會政策學會大會に於ける論究は小農は現状の儘に保護す可し否現状よりも更らに之を奨勵す可しとの前提を不可動のものとして看做して下されたるものゝ如し而して我邦農家の大多數は小農なれば小農保護とは即ち日本農業の保護と同一事なりとの斷定は終に打破せられざりしものと言ふ可し。

從て小農保護其ものに就ての研究は十分に吟味せられず廣汎なる日本農業振興問題と改題せられたるの觀あり予は特に之を遺憾とす何となれば此くの如きは問題の混淆なればなり。日本農業の振興す可きことは始めより誰も之を争はず日本農家の向上發展の急要なることは討論を須らずして自明なる通理なり。學會に於て學者が頭腦を集中する問題としては餘りに漠然たり餘りに非分科的たり。社會政策學會の問題とせし所は農業振興上の凡百の問題中特に小農保護の必要なりや否や必要なりとせば如何なる政策に依る可きや是れならずんばあらず。小農を特に保護することによりて日本農業全體の衰微を招致す可きこと明白となるあらんか小農保護の必要は之れ無しとの斷案に到達す可く或は小農は保護す可きも現状の儘に之を保護するか又は數に於て或は小の程度に於て之を變更せしめて保護す可きか否爾かく變更することが保護の第一着手にあらざるか等を考究して日本農業全體の振興の爲めには現状の打破必要なりとならば今日の儘にての小農保護は却て有害なりとの結論に到達することある可きなり。然るを一足飛に小農保護とは即ち日本農業保護の謂なりと斷ずるは論理之を許さず事實

亦之を認めざるなり。斯くの如きは一場の Logomachy; Phrasemacherei としては聽き得可けんも、學問研究上の問題たること能はず。例を工業に取りて云へば、手工業保護問題は之に似たり。手工業者は數の上に於て我邦工業者の大多數を占む。今手工業保護とは即ち日本工業保護と同一なりと云はんが、人誰か其構想の散漫なるを笑はざらん。手工業は近世工業發達の大勢上衰退することは到底免る可からざるは誰も之を疑ふことなし。然るを手工業を現状の儘に保護し其從業者數の減少を防止し其範圍の縮少を沮障せんとするときは邦の工業全體は必ず爲めに害を受く可し。一國工業の發達を希ふものは或程度まで手工業者數の減少し其業の範圍の縮少するを却て歓迎せざる可からざるにあらずや。

右の理由により本年社會政策學會の討議は前例に異り著しく『バーヂサン』的色彩を帯びたり。是れ實に遺憾の事なり。農業黨の諸君農會々場に相集りて行論し討究する或は斯くの如くなるも可ならん。純學問の機關たる社會政策學會に於ては然らず。我等は農業の振興を欲すると同じく商工業其他一般産業の振興を欲す。凡ての利害關係の上に超然として公平客觀の見解を磨かざる可からず。 Interessent-

wissenschaft たるは斷じて社會政策學を進むる所以にあらず。

(二) 神戸氣賀兩教授の農村改良論

社會政策學會の討論に智識慾の充實を感ずる能はざりし予は更らに轉じて農政の學に精しき先輩の教に接せんことを思へり。恰も刻成の和田垣教授在職二十五年記念『經濟論叢』は予が案頭に在り、乃ち緝いて之を見るに神戸法學博士の『日本農業の將來』と氣賀教授の『農村改良の要件』の二篇著題は同じからずと雖も粗々同一の問題に就て生平の蘊畜を傾倒せらるゝあり。此二篇を通讀するに氣賀教授の立つ所は高岡博士の其れに近く、神戸博士の執る所は横井博士の其れに遠からざるものゝ如し。氣賀教授は曰く『農村をして有爲者階級の人物缺乏を惹起せしめたる因襲的社會關係の改良は我國現今の最大急務たらざるを得ず』右書二百と、是れ高岡博士が小農保護農村改良の最大急務は先づ農民自らの自覺を喚起するに在り、他の方案は此前提の下に始めて有效なり得可しと主張せらるゝと言異にして意即ち同じきものにあらずや。氣賀教授は更らに言を進めて予が最高等油虫たるの危険ありと云へるものに就て曰く『晩近農村改良の爲に頻々開催せらるゝ

幾多の農村古老及び官僚徳家(官僚學者も亦加ふ)の道德的講話も多くは是た農村改良に資せずして却て改悪を催すなきかの感なきを得ず(中略)享樂を望むは人類大多數の本能なり僅數の聖人君子は或は高遠なる倫理觀念に依りて此本能を制馭するを得可けんも多數農民をして悉く聖人君子たらしめ高尚なる倫理觀に訴へて克巳制欲仙人的生活に満足せしめんとするは確に泰山を挾んで北海を越ゆるよりも難事たらざるを得ず農民生活の程度頗る低きものゐるを認めつゝ只管其欲望を制して其分に安んじ先覺者上流者の指揮指導の儘に蠢々乎として一生を費すを勸むるが如きは全然人情の自然に反せるの教理到底永く人心を支配する能はざるなり縦令或は斯る教理の一時一般人心を支配するありとするも斯る退嬰的思想に満足せる農民は經濟上進歩の望あるなし從て物質的競争の激烈なる今日の國民經濟場裡に永存し得可からざるの國民分子と云はざる可からず同二頁又曰く「試に思へ農工銀行は設立せられたり産業組合は獎勵設立せられたり耕地整理疏水灌漑の事業は鼓吹激勵せられたりと云ふと雖も其實際に農民を裨益せるもの果して幾何ぞ農工銀行農産業組合の多數は實際其實績を擧げざ

るの弊なきを得たるか幾多の土地改良事業中利益の失費を償ふに足らざるものなしと斷言し得るか農學校補習學校は設立されたり共進會は開催せられたりと云ふと雖も其の學校卒業者は果して農業に興味を有し喜んで農村に定住するの精神を有しつゝ校門を出でしか否か實際の農業に従事するを好まず寧ろ靴と洋服とに其生を托せんことを希ふ者多からざるなきか(略)想ひて此に到らば蓋し實行の局に當れるの人士と雖も常に悉く良心に耻づる所なきを得ざるもの少からざる可し同二頁と教授の所言は實に今日の社會政策の尤も進歩せる立場を道破するものにして予は其全部に裏書するを禁する能はず予は横井博士に向て農學者生が「テキサス大地主」を理想とするの不可解所なるを指摘せしが現今の農學者殊に青年學士が一方盛んに海外移民を主張しつゝ他方都會集中を非難するの不合理的態度は靴と洋服とに其生を托せんことを希ふもの多き』の致す所なるを思はずんばあらず斯くして『ポロ的油虫』を痛罵しつゝある農業黨の急先鋒は却て高等油虫の續出を促がしつゝあるなきやを疑はざるを得ず予は横井博士より教へられたるんことを欲せしもの博士之を教へず却て氣賀教授によりて教へられたるは實は

外とする所なり。然るに轉じて神戸博士の農村改良論を聞くに曰く「其には農業
 者に副業を供して閑暇なからしむることも肝要であるが、更らに又其日常の需
 品なども成るべく手製のものにて甘んじ、又此に趣味をもつこととなるようにす
 ることが肝要である(略)今日交通が便利になつたが爲めに農民が従來手製で作つて
 居た物が最早都會より供給さるゝやうになつたが、農民などは之を餘程の程度ま
 で自ら作る方が得策である(略)手製の著物、手製の傘、下駄、道具などは勿論、味噌、油
 なども手製を用ふるが良い、特に農民が如何に本業及副業に精勵しても尙ほ多少
 の遊ぶ時間をもつものであるが、此遊ぶ時間に遊びつゝ何か自用品を作ることは
 最善良の風俗である(略)特に近頃は農民も電燈や電車などを利用することになつ
 たが、此等の便利なるものを有益に使用するならば良いが(略)其利益は到底弊害を
 償ふに足らない、即ち電燈自身は却て油よりも安くつても電燈を點したる以上は
 燈も建具も改良せざる可からずとなつては良くない」^{同上}又曰く「先づ農民も一
 般社會人國民人としての立場より各人が社會又は國家より受くる所の大恩に對
 しては如何なる犠牲をも辭せずとの念を起し、又假令地位は低くとも得る所の收

入は小なりとも世の中の爲めに必要な役目を盡したることに於て満足を感じず
 ることにならなければならぬ(略)故に農民は正直となり、商工は不正直となる傾が
 かつて道義的生活は寧ろ農業者たるに於て完全に望むことが出来る」^{五七―五九頁}と。
 予は博士の言を聞いて「自家生産し得るものを他より買ふ農夫は排斥す可し」と
 教へたる羅馬哲學者を追想せざるを得ず、博士は我農民の自足經濟を其儘に維持
 し、若しくは更らにより多く自足的ならしめて今日の交換經濟より遠からしめん
 と欲する極端なる復古論者なり、小説的、架想的「ロマンチカー」なり、道學先生なり
 說法師なり、修身教師なり、心學先達なり、農民の電燈電車を用ゆるを厭ひ、下駄、傘、味
 噌醬油を手製することを訓ふる博士は、何故農民のみに斯く說法して他の階級に
 之を強ひざるや、何故大學教授は電燈電車の便を擅にし、下駄も傘も之を買入れて
 可なりや、博士は何故躬行實踐自ら其遊ぶ時間に於て遊びつゝ味噌を作、醬油を
 醸さずして農民のみに之を強めて差支なしとせらるゝや、「社會又は國家より受
 くる所の大恩に對しては如何なる犠牲をも辭せずとの念」は農民のみの必要とす
 る所にあらず、誰人も一樣に攘抱せざる可からざる須要事にあらずや、何故に本業

副業に精勵する農夫が多少の閑時を有して心身の娛樂に従ふことの不可にして、其閑時に於て猶下駄傘を作らざる可からざるや、博士自ら其の有する閑時を農民に命ずるが如く自ら傘と下駄と味噌と醬油とを作ることに充當せらるゝや如何、農民のみ獨り克己的なれ制欲的なれ献身的なれと命ずるは農民を愛するもの、態度と云ひ得るか、且つ此の如き修身訓は學問研究上何の權威を有するか、特に之を經濟學の專攻者に待たずとも一寺の住職一村の長老却つて説いて更に適切なるを得可きにはあらざるか、予は『經濟論叢』中に此文を見出して一驚を喫せざる能はざりき、而して之を同一問題を取扱へる氣賀教授の所論と對校して均しく學問研究の結果たる學者の所論なるに斯くの如き大逕庭あるに強き興味を覺へざる能はず、博士曰く『其は單純なる想像や妄想やでなく過去及現在の事實に基き並に斯學及其他の方面に於て行はれたる理論に稽へて推究することとならなければならぬ』同二十一頁と誠に然り、然りと雖も『嚴格にいへば學者としては避けなければならぬ』ことは必ずしも將來を談ずることにあらずと雖も、更らに一步を進めて博士の如く教訓説法的態度を執ることは政策の研究に就て如何な

る立場を取るとも(政策の研究に就ての予の意見は無論博士とも又た本邦) 學者として断然避けざる可からざる所なるにあらざるか、少くとも予が學問研究に就て有する現時の見解は然りと答へしむるなり、第一博士の教訓は難きを他人に責むるものなり、第二教訓必ずしも不可ならずとすも、學者の教訓は堅固なる根據を學理研究の上に置くものならざる可からず、第三博士の教訓は反動的なり、復古的なり、退化的なり、近世國民經濟發達の大勢に逆行するものなり、第四博士の教訓は『日本農業の將來』なる主題と何等系統的關係を有せず、博士は狗頭を掲げて羊肉を賣らんと欲するものならざるか、凡そ此等の考察は予をして横井博士の小農保護論に失望せしめたると同程度に於て神戸博士の農村論に失望せしめたり、工業政策又商業政策並に財政學等に於て深奥該博なる研究を續出して予輩等を啓發する所頗る多き博士の農業論の斯くの如くなる實に奇と云はざるを得ず、退て考ふるに横井博士も神戸博士も共に農業問題に就ては餘りに多く現狀に囚はれ、從て應急臨機の政略論道德訓に没頭し生平の研學者と全然異なる態度を取るに至れるにはあらざるか、反對に斯く囚はれざる高岡氣賀兩教授は農業問題に就ても他の間

題に於ける全く同一の客觀的立場を一貫せられたり。是れ均しく學問上の研究の結果たるに其到着地の斯く甚しく軒輊するに至れる所以なるなきを得んや。果して然りとすれば今の時の農業論に尤も要する所は應急臨機の處方調劑を中止して先づ冷靜に慎重に我邦農業病源の真相を究むることに存すと云はざる可からず。

予は此感想を懐くこと既に久しと雖も元來都會に生れ都會に長じ今も都會に生活するものなれば農業の實狀に就ては全然門外漢たり。唯だ書冊の上に見はれたる所を材料として考を立て思を構ふることを得るのみ。茲に於て予は農學の泰斗たり實驗的經濟學者の白眉たり農業改良の急先鋒たりし英國の學者アーサー・ヤングの書の寓目し得たるもの一二に就て學ぶ所を以下に記述して我邦に於ける嚴密なる純學理的農業經濟論の振興を待たんと欲す。元より予が主として興味を置く所は學說史の研究に在りて政策の研究に存せず。理論の研究に存して實際の立案に在らず。記述する所學說史の一文として見られんは元來の素志にして社會政策學會に於ける討論と直接に關聯するものにあらず。然り然りと雖も予は討

論會上横井博士に向つて農科大學に隠れて悪口が最も有效なり杯と憶病なることを言ひ給ふ可からず先づ隗より始めて野に下り自ら農業改良の『バイヲニア』となり大正のハムブデンとなり二宮尊徳となりて農村に出入して農民の自覺を鼓吹するの更らに農業に忠なるものあるに非ずや』と言ひしは實にアーサー・ヤング其人に想到したるが爲なり。ヤングは單に學者として農業改良を提唱したるに止まらず自ら英佛の各地方を遍く踏査し野に叫べる人として農民の開發に半生を捧げたる人なり。即ち一の實人教訓としてヤングを薦むるの徵意又た必ずしも之れなりとせざるなり。

附言 予は社會政策學會第二日の講演に英佛開戦の際に於ける兩國大小農制度に關するアーサー・ヤングの研究なる題を以て演述する所ありしも當日時間の短かりし爲め所思の半を盡くす能はず、以下記述する所は即ち當日講演の腹案たるものにして彼の足らざる所を補足するものたり。此事當日會衆に約束せる所にして今其約を果たすを得るは満足の次第なり。

(二) 本 論

(一) アーサー・ヤングの爲人并に學問

アーサー・ヤングは千七百四十一年寛保元年九月七日サツフォーク州に生れ千八百二十年文政三年四月十二日倫敦に死す。即ちアダム・スミス千七百九十三年生と殆んど時代を同ふして生存し、從て我邦の三浦梅園、正司考祺、井上四明、本居宣長、中井竹山、同履軒、荏戸太華、海保青陵、松平樂翁等とも粗ぼ生時を共にするものなり。彼は數年實際農事に従事したる經驗を以て農業に關する著述を爲すこと甚だ多く、殊に英佛兩國を巡歴して其農事狀態を研究記述たる旅行記は比倫少き有益の書として知らる。即ち其目左の如し。

- (1) The Farmer's Letters to the people of England. 1767
- (2) A six weeks' Tour through the Southern Countries of England and Wales. 1768
- (3) A six months' Tour through the North of England. 1770
- (4) Rural Economy. 1770
- (5) The Farmer's Tour through the East of England. 1771
- (6) The Farmer's Calendar. 1771
- (7) Political Arithmetic. 1774

- (9) 同 Part 2. 1779
- (9) A Tour in Ireland. 1780
- (10) Travels in France. 1792

外に彼の子アーサー・ヤングの編述にかゝる

General Views of the Agriculture of Suffolk, Lincoln, Hertfordshire, Norfolk, Essex, Oxfordshire, Sussex. 1794-1804.

あり。又だ彼が編纂主幹たりし農業雜誌 *Annals of Agriculture* 千七百八十四十六卷あり、中に彼の筆に成る文章を多く載せたり。又た *Inclousures* 調査報告 千七百七十七年あり、別に自叙傳の作あり。近年千七百八十九年刊行せらる。

アーサー・ヤングの著述は廣く行はれ佛獨語に譯出せらるゝもの尠からず、即ち佛譯には

- (1) Voyages en France. Traduction par Lesage. Paris 1860. 2.E. 1882.
- (2) Voyages en Italie et en Espagne Tr. par Lesage. Paris 1860
- (3) Arithmétique politique Tr. par Fréville Paris 1780.

(4) Voyages en Irlande. Tr. par Millon. Paris 1779

等あり。獨譯には

(1) Reise in Frankreich von Zimmermann. Berlin 1793.

(2) Reise in Irland. Leipzig 1780.

(3) Politische Arithmetik. Königsberg 1777.

等あり。彼の學問の獨り祖國に於て尙ばれたるのみならず他國に於ても尊重せられたるを知るに足る。アムシューミー氏は彼を其著作をを評して

The most noteworthy of English writers on agriculture.....Young's place in history is due, first, to his remarkable qualities as a keen observer, which give his works a permanent value as sources of information on the conditions of his time; and, secondly to his own considerable share in stimulating the movement for the substitution of large farming for small, of enclosures for open fields, and of rotation of crops for periodical fallows. Palgrave's Dictionary of Pol. Economy. Vol. 2. p. 687.

アムシューミー氏は又た

Un des écrivains agricoles dont les ouvrages sont le mieux connus et le plus appréciés en France. Ce n'est pas par amour-propre national que nous l'estimons. Young était Anglais et il ne cache pas un seul instant ses préférences pour son pays. Ce n'est pas davantage à cause de son admiration pour nos qualités ou de son indulgence pour nos défauts, car il ne se gêne guère, en mains endroits, pour humilier notre orgueil, blesser notre chauvinisme et nous dire les plus diens vérités. Mais Young avait de grandes qualités et il eut un grand bonheur. C'est, tout d'abord, un homme d'esprit : il possédait la finesse malicieuse et enjouée, qu'on appelle "humour" et ses ouvrages empruntent à cette tournure de son esprit un attrait spécial. Notre auteur était, en outre, un observateur d'une merveilleuse sagacité, il connaissait admirablement, chose souvent rare, les sujets qu'il a traités, c'est-à-dire, les questions agricoles et économiques et agitées étudiées de son temps. Nouveau dictionnaire d'E. P. t. 2. p. 1196.

と稱せり。元よりヤングはアダム・スミスの如き哲理的修養を積める學究にあらずマルサスの如き考證家にもあらずリカルドの如き鋭き論理家にもあらずされば純理研究者として彼を認む可からざるは勿論なり。唯だ彼が天稟の鋭き觀察力を

事物の真相に徹底する眼孔とは其實地上の豊富なる經驗廣き旅行より得たる智識と待て農業上の問題に關して當時に於ては隨一の權威たり後世に對しては偉大なる典型たるを得せしめたるなり。マルサス研究學者として有名なるポーナー氏がヤングを評して Young, whose eccentric energy benefited every one but himself (Bonar, Malhus and his Work. p. 216) と云へるもの寧ろ彼に取りては知己の言たらずんばむしろ彼は枯木寒巖に倚る底の道學先生に非ず其眼には涙あり其脈には温き血の通へる愛國の士なり而も佛人は彼が口を極めて英を誇り佛國を痛罵するの言を聞くを喜び尤も有益なる論議なりとし其佛國旅行が恰も大革命の將さに起らんとせるときに企てられたるは佛國の幸にして彼の佛國旅行記は當時の佛國經濟状態を學ぶに於て佛國學者の作の遠く及ばざる絶好の資料なりとし獨逸農政學の泰斗アルブレヒト・テアは殆んど彼を待つに學師を以てせり。マルサスは彼を以て人口論に於ける自説の先覺者なりと云いて詳かに其論を評隙せり。此事に就ては入口の法則と生存權或定經濟學研究第六篇マルサス及リカルド研究に稍々詳論し置けり就て見よ。然れば予が農業政策の學理的研究に於て這箇ヤングを一の權威として籍り來り我邦の小農問題研究者に他山の石

を供せんとする所以の失當にあらざること反對論者と雖も亦必ず許容する所ならん。彼が大農謳歌論を其儘に獨逸に輸入せんとする企てが學者の非難する所たりと云ふは矢作法學博士が予に答へられたる評言の一節寸毫も彼を損するに足らず又予が紹介を無用とする所以たらず罪は一に Epigonen にあり予がヤング調製の大農丸を以て我邦農業の過小農中毒に對する好箇の antidote なりと戲言せし所以は其大農論を生存活剝せよとの意にあらず彼が主張の生命とし精神とする所を取りて自家の玉を磨く他山の石たらしむ可とし主張するのみ我邦に英國流の大農の行ふ可からざるを認むるに於て予は論者と全然同一見解を取るものなり殊に小自作農が國の健全なる礎石たる可きことは予の確信して疑はざる所なり然れども我邦農家疲弊の最根本病根を以て其餘りに甚しき過小農に存せりと信する予は先づ小農の現状を飽迄維持せんと欲する農業黨の諸士に向て姑く逐日捉時の政略劃策を離れ客觀に百年の昔に立返りてヤングの觀察したる研究したる所に就て潛心の考究を試むるの必ずしも無用の業にあらざるを主張せんと欲するものなり。

(二) 『政治算術』に見はれたる英國大農論

(A) 『政治算術』解題

ヤング一生著述する所斯くの如く夥多なりと雖も、其最も重要なるものは『政治算術』、『愛蘭旅行記』、『佛國旅行記』の三者にして、就中『政治算術』の一書は彼が一生の最傑作たり最雄篇たり、即ち此書に就て彼の英國大農論を窺ひ、『佛國旅行記』に就て其佛國小農論を知るを得可きなり、而して予の今日迄に寓目し得たるものは實に此二書の外に出でず、故に今未見の他書に論及することを爲さず唯這箇の二大雄篇を讀了して得たる所の一端を記述するを以て甘せんとす。ヤングは其『政治算術』に於ても佛國に論及することありて英佛比較論は彼が好んで研究したる題目たるを察知し得るなり。

さて『政治算術』の書原名は頗る長くして左の如くなり、

Political Arithmetic. Containing observations on the present state of Great Britain and the principles of her policy in the encouragement of Agriculture. Addressed to the Economical Societies established in Europe. To which is added, A Memoir on the corn trade : drawn up and laid before the Commissioners of the Treasury. By Governor Powvall. London 1774.

之を意譯すれば

『政治算術』大不列顛國の現狀に關する觀察并に農業獎勵に於ける其政策の原則歐洲諸經濟會に寄す附録ガヴァナー・ポール立案大藏省委員會へ提出の穀物貿易考、倫敦千七百七十四年』

なり。此書三浦教授探出の一本高商圖書館にあり、學友左右田講師の書架に藏本二種あり、而して左右田氏藏本の一には更らに右書『第二部』なるものを添付す。蓋し彼は此書を一巻の單行本として著述公刊したる後、バルトネー氏の著作に接し更らに自説を出すの必要を感じ、之を『政治算術』の第二部として千七百七十九年に公けにしたるものにして、其論述する所必ずしも『政治算術』本書と有機的に關聯すかもの、に非ず、別書として之を公けにするも敢て差支なきものなり。思ふに『政治算術』の書其名喧傳したれば別題の一書とするよりも其の第二部とする方人の注意を惹き易しと考へたるにあらざるか。但し此は予の推測のみ、憑據ある斷定には非ず。其『第二部』なるもの、書名は左の如し。

Political Arithmetic. Part II. Containing considerations on the means of raising the Supplies

within the year. Occasioned by Mr. Pulteney's Pamphlet on that Subject London 1779.

此書は英米戦争立^米國獨^國の最中に、主として戰時財政の見地より軍費并に國民生活料の供給を充實する方案に關し、バルトネー氏の所論を評、騰したるものにして、恰も百有餘年の後、英國が獨逸と交戦中なる今日に於て之を讀むに興味大なるものあり。英米戦争は間もなく英佛大戦争によりて接續せらる、佛國大革命、米國獨立戦争、ナポレオン戦争の續出せる當時に於ける世界の二大國たる英佛兩國比較論は、誠に趣味深き研究題たり、之を眼光炬の如きアーサー・ヤングに就て學ぶ、百年後の讀書生の幸も亦た大なる哉。而して予は先づ左右田、三浦兩君が這箇の貴重資料を自由に予の手に置かれたる芳志を深謝せざる能はざるなり。

附云。バルトネーの書著題左の如し。

Pulteney, Consideration on the present state of public Affairs, and the Means of raising the necessary supplies.

但し予は未だ此書を見るを得ず。

(次號完結)

ベルナルド・ダヴンツァチの貨幣論(下)

高橋 誠 一郎

「太陽と地熱とは恰も蒸溜法を行へるが如くに地球の内部に於ける最良の液體と固體とを分離せしむ、斯くてそは適當なる鑛脈及び鑛坑に滲通し、而して茲に凝結して次第に堅固と爲り成金して、聽て金屬と化す、就中最も稀少にして且つ完美せるは黄金と白銀との二者にして、其光輝と色彩とに於て世界の二大發光體(日月)に類似せり。彼の講演は斯くの如くして、其緒を發したり。貴金屬の永續不朽にして、然も變通自在なる性質は人をして往々彼等の内に神明の宿るを想はしめ、或る印度種族の如き黄金の採掘に従事する場合には必ず食を斷ち、婦人との交、並に其他一切の歡樂を遠くるの常なりと謂ひ、其萬能力に言及しては、聰明勇武なる古王の言を引きて黄金を荷へる驢の動し得ざる巖なすと説き、彼のジニピター大神が Danaë